

リポート Report

大磯町郷土資料館だより
1991・12・15

3

もくじ

- | | |
|--------------------|---|
| ◇古代の餘鱗③ | 2 |
| ◇博物館実務実習レポート | 4 |
| ◇大磯丘陵のセミぬげがら調査引の概報 | 6 |
| ◇トビックス/行事案内/資料の受入 | 8 |



Fig.1



Fig.2



Fig.3



Fig.4



Fig.5



Fig.6



Fig.7

10mm

〈館藏品にみる〉

古代の餘綾(3)

考古学で取り扱う遺物は、ときには完全な形で残っており、使っていた当時の様子を再現できるようなものに遭遇することもあるが、多くの場合は断片的なものに留まり、使い方などの解釈に四苦八苦することが多い。殊に、私たちが日常生活の上で使用していないような遺物が出てきたならば、どのようにして用いられていたものかさっぱり分からない。現在でも、ひと昔前ならどこの家庭にでもあった、経節削りの箱や洗濯板など、今はどこの家庭を捜しても見つからない。削り節のバックや全自動洗濯機を見て育ってきた世代が、50年・100年後にこういった遺物を発見したときに、こういった解釈をするのであろうか。

狐塚採集の獸脚

図1に示した遺物は、遺物の底面に残された注記によると、昭和38年3月20日に狐塚の東にある道路にて採集されたものである。狐塚とは現在の国府新宿(宇馬乗面)にあたる。

遺物は須恵器製の獸脚付短頸壺の獸脚部分が残存したもので、残存高が6.3cm、足部の幅4.7cmを測る。非常に丁寧なヘラケズリによる面取りが行なわれ、足指の表現もへらにより深く刻まれ、4本指の表現がなされている。外面には灰緑色の自然釉が付着し、胴部内面に当る部分にも同様に自然釉の付着がみられる。

そもそも獸脚付短頸壺とは、図2-1に示したとおり、丸底の須恵器短頸壺に、獸脚を模した脚を3ヶ所取り付けただけのものである。残念ながら旧相模国内においては、獸脚のみの出土例が大半で、全容が知れるような完形品の出土はみえていない。普通このような獸脚付短頸壺は、奈良時代を通じて、火葬骨甕器として用いられることが多いとされている。

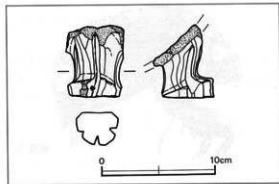


図1 狐塚採集の獸脚実測図

東海大学文学部助手 田尾 誠 敏

古代の火葬墓については、南武蔵地域を中心とした村田文夫・増子章二両氏ならびに長谷川厚氏の論考がある。その中で、火葬骨甕器については、土師器による火葬骨甕器が大半であるが、少ない例ながら獸脚付火葬骨甕器についても触れられている。村田・増子両氏の集成によると、獸脚付短頸壺が出土している例は全国でもわずか12例に留まっており、うち5例が南武蔵より出土したものである。また長谷川氏も、こういった獸脚付短頸壺の出土は南武蔵地域に集中し、その用途が南武蔵地域では火葬墓に限られていると述べられている。

こういった隣国南武蔵地域と比べて、相模の様相はどのようなものであろうか。そもそも相模地域では、火葬墓の検出例自体が極端に少ない。藤沢市で4例、海老名市・厚木市で1例ずつ、平塚市で5例といった様子である。平塚市新町遺跡で調査された3例を除いては、南武蔵地域のように群構成が捉えられるものは無く、ほとんどが単独で発見されたものである。さらに今のところ、相模地域のこういった火葬墓は、土師器製の骨甕器の主体を占め、獸脚付短頸壺の出土は報告されていない。

図2-2~9に挙げたものは、旧相模国出土の獸脚付短頸壺の類例である。全て獸脚部および胴部下半以下の破片であり、全体が伺い知れるものはない。狐塚出土例を含む9例のうち、半数の5例が平塚市内の出土である。ただし4・6・7については、獸脚付短頸壺ではなく、三足付きの甕や他の器種になる可能性も考えられる。また参考として、綾瀬市宮久保遺跡出土の灰釉陶器製の三脚付盤(8)を挙げておいた。

獸脚付短頸壺の年代的な位置付けについては長谷川氏によって、獸脚の爪の形態変化と器形の形式変遷から、3段階の変化が指摘されている。それに従うならば今回紹介した狐塚出土の獸脚は、平塚市梶谷原B遺跡(3)・同四之宮下郷遺跡(8)・小田原市三ッ俣遺跡(9)各出土例とともに、ヘラケズリによる丁寧な面取りが施されている点や、指がはっきりと表現されている点などからも、東京都昭島市玉川遺跡出土例(1)に近似し、初期の8世紀前半代の所産であると考えられる。また鎌倉市千葉地東遺跡例(2)は、面取りは比較的丁寧に施されているものの、指の表現がキザミにより簡略化している点や、獸脚の長さがやや長くなっているところなどが、東村山市徳蔵寺所蔵例と近似しており、8世紀中葉頃の所産と考えられる。そして平塚市坪ノ

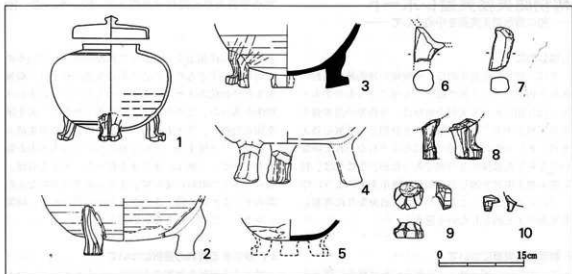


図2 獸脚付短頸壺の完形例と相模国内の類例

(①東京都昭島市玉川遺跡、②鎌倉市千葉地東遺跡、③平塚市梶谷原B遺跡、④平塚市坪ノ内遺跡、⑤-⑧平塚市四之宮下郷遺跡、⑨-⑩平塚市神明久保遺跡、⑨小田原市三ッ俣遺跡、⑩綾瀬市宮久保遺跡；灰矽三足壺 ①は村田・増子論文、他は各報告書より)

内遺跡例(4)・平塚市神明久保遺跡例(6・7)が獸脚付壺であるならば、退化した獸脚の形態から、8世紀末～9世紀初頭以降の所産になるものと思われる。これらの獸脚は先に述べたとおり、火葬墓出土のものではない。9例中5例が住居址出土のもので、他は獨立柱建物址の柱穴や井戸址・包含層出土のものである。これらの遺構に伴う土師器・須恵器などの遺物は、必ずしも獸脚の年代とは一致していない。

さて、3の獸脚付短頸壺が出土した平塚市梶谷原B遺跡は、旧相模国内で唯一、数例まとまった火葬墓が確認された同市新町遺跡に隣接しており、調査者の青地俊朗氏も相互の関連性を指摘している。さらに興味深いことに、獸脚付短頸壺の出土した2号住居址からは、6個体の南武藏型環が出土しており、相模型環よりも数において優位を占めている。南武藏的な色合いの強い住居址から、こういった獸脚付短頸壺が出土している点や、隣接して火葬墓群が存在する点など、本地域の火葬墓を考える上で重要な資料となろう。

相模地域の火葬墓は、現在のところ奈良時代にさかのぼりえるものは報告されていないが、獸脚付短頸壺からみると、当該時期にさかのぼるものが発見されても差し支えないと思われる。大磯丘陵や、伊勢原の山間部など、7世紀後葉から8世紀初頭にかけたの横穴墓が展開する地域において、どのように墓制が変化していったのであろうか。また南武藏地域を含めて、こういった火葬墓はその数からも、その時代に生きた全

ての人が葬られたとは考えがたく、依然一定階層以上の人たちの墓であるという感拭い去れない。それでは、奈良・平安時代の大集落を営んだ一般民衆は、いったいどこに葬られたのであろうか。

引用・参考文献

- 長谷川厚 1983 「歴史時代墳墓の成立と展開(1)」『古代』第75・76合併号
- 平塚市遺跡調査会 1984 『四之宮下郷』
- 長谷川厚 1987 「歴史時代墳墓の成立と展開(2)」『古代』第84号
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1987 『三ッ俣遺跡第2分冊』
- 平塚市教育委員会 1987 『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書2』
- 村田文夫・増子章二 1990 「南武藏における古代火葬骨甕器の基礎的研究(F)」『川崎市市民ミュージアム紀要』第3集
- 明石新ほか 1990 「平塚市新町遺跡の調査」『第14回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 平塚市教育委員会 1990 『梶谷原・高林寺遺跡他』
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1990 『宮久保遺跡Ⅲ』

博物館実務実習レポート

——特に展示替え実習を中心として——

東京学芸大学人間科学課程3年 松本泰治

1. はじめに

今回の博物館実務実習は、小規模の博物館の活動の実態を知る、という面ではとても役に立つものであった。12日間にわたる実習の概略は、博物館の諸業務や実技実習が中心であった最初の9日間と、「展示替え実習」という他の実習館ではほとんど行なわれていないことをした最後の3日間であったが、ここでは、特に展示替え実習を通して博物館の展示をどのように作っていくのかということについて、自分なりに考察して実習のまとめとしたと思う。

2. 展示替え実習について

この項では、展示替えという、いわば展示に関する一通りの作業に従事して考えた自分なりの展示論を述べてゆきたいと思う。これから、(1)展示におけるシナリオについて、(2)展示する資料の選択について、(3)キャンペーンについて、(4)照明について、という4つの点に分けて述べてゆくことにする。

2-1. 展示におけるシナリオについて

展示には、その展示全体を貫くシナリオが必要である。ただ関連性のないものを並べるだけでは、それは展示とは言えず「陳列」になってしまう。展示におけるシナリオというものは、展示ごとが持つ情報全体を要約したテーマを、さらにテーマごとが一貫性を持つように構成したものであると考える。

実際の展示替え実習においては、このシナリオを決定するのは3日のうち1日を要してしまった。これには3つの理由があった。1つは実習生が考えていたシナリオが、他の館内の常設展と部分的に重なることが多かったというもの。もう1つは、3日間という短時間で1つの展示を作らなければならなかったため、必要な資料の購入・レプリカ作成・借用などが難しく、展示に使える資料は館に収蔵されていた資料のみであったというもの。最後の1つは、実習生全員が大磯という「まち」に関連した独自性のある展示シナリオを考えようとしたために、大磯という「まち」に対して実習生が持っていたイメージ（海・東海道・宿場など）にとらわれすぎて、自由な発想ができなかったというものである。

このような問題点がシナリオ決定にはあったが、結局「大磯・戦時下の子どもたち」というシナリオが決まった。「子どもたち」を対象としたのは、大人のこ

頃の生活は報道などによって比較的知られているのに対して、子どもたちのこの頃の生活の様子は、戦後生まれの世代の人々にはあまり知られていないという理由があった。このため、この頃の子どもたちの生活を知るために、子どもたちの「食生活」「日常生活」「遊び」「学校生活」という点について3人の方から話をうかがって展示シナリオを作った。本来ならば、もっと多くの取材によって、より正確で具体的なこの頃の子どもたちの様子をつかみたかったのだが、時間が少なかったので仕方ないのだろう。

3-2. 展示する資料の選択について

展示する資料を選択するには、シナリオに沿ったものを選ぶのはあたりまえであるが、展示をするスペースを考えれば、展示できる資料数が限られてくる。この資料数を限るという点には、2つの考え方があろうと思う。1つは、展示する資料を必要最小限にとどめてキャンペーンなどによって資料を詳しく解説し、資料についての理解を深めてもらうか、展示する資料を多くして、キャンペーンなどによる解説は少なくして見たままのことに考えてもらうという考え方である。今回の展示替え実習では後者の考えをとり、キャンペーンには「これらのものを見て、何かを感じとって下さい」というように述べて、見る人に自主的に学んでもらおうという形にした。

「食生活」には、子どもたちの食生活の中で、特に子どもらしいものとして、学校へ持ってゆくお弁当をとりあげ、これに関連する資料としてアルマイト製の弁当箱と、取材によって知った当時の一般的なお弁当の中身というイラスト（ただのイラストだけだったがもう少しイラストについての解説をつけておけばよかった）を展示した。このテーマでは、最初から弁当についての展示をし、それを中心的なものにすることにしていたので、展示する資料をあれこれ選ぶということはしなかった。また、子どもたちの食生活だけと関係があるわけではないが、当時の食生活をしのばせる防空食（缶詰のかわりの、いわばビン詰）も展示した。

「遊び」というテーマでは、当時の子どもたちがどのような遊びを、どのような道具を使って遊んでいたのかを取材によって知り、結局、すごろくと竹とんぼとじっくいを展示した。また、取材により、当時の子どもたちは家の手伝いの合間に遊んでいたという、現

在とはずいぶん異なる子どもたちの遊びの現実を知り、キャンペーンの文章に活用した。

「学校生活」という面では、当時の尋常小学校で使用されていた教科書を数冊展示した。当時の学校教育の状況を示すものとして、文章などに戦争・兵隊など戦争を美化する内容のみを国語の教科書、神話から読みおこす歴史の教科書、日本の侵略した朝鮮半島や台湾などが日本の領土として扱われている地理の教科書などを展示したのである。

その他に当時の子どもたちをとりまく世間の様子をあらわすものとして、新聞に連載されていた四コマ漫画のコピー、写真パネルを2枚、雑誌の付録の世界地図、戦争の様子を伝える紙芝居を展示した。

2-3. キャンプションについて

キャンペーンの文章は、これから述べてゆくような形式で作られた。

まず、全体の展示テーマ「大磯・戦時下の子どもたち」をとりあげた理由を述べ、さらに先に述べた4つの展示ごとのテーマについての説明をし、全体のキャンペーンの文章に一貫性を持たせるようにしたのである。これらのキャンペーンの文章は、展示を見る人になるべく読んでもらうために次のような点に注意しながらつくった。それは、1点目に「いちばん長い文章でも100文字以内にします」というものであり、もう1点は「難しいことばをなるべく使わない」というものであった。特に2点目には苦勞した。昭和初期のふつうに使われていたことばでも、今の若い自分たち実習生の世代には難しかったので（特に戦争関係のことばなど）、専門用語や漢語の表現を文章からなるべく排除することを心がけた。その他、個々の展示してある資料にも、なるべく簡潔になるように文章をつくり、キャンペーンにした。個人的に自分は、この作業に中心的に従事したのだが、文章の出来（特に全体展示テーマをとりあげた理由説明の文章は気に入っている）には満足している。

2-4. 照明について

照明については、今回の展示替え実習において、いちばん問題が多かったと思う。これはやはり、展示に関係する他の作業をするのに時間がかかりすぎ、照明について考える時間がなかったからであろう。問題点というのは、どうしても影が濃くなってしまふ資料が出てしまうという点や、その反対に照明が暗くなって見にくくなった資料やキャンペーンが出てきてしまったという点である。この他に照明について注意し

なければならない点は、ある資料をあてるために、他の資料を見る人の目に光を入れないように気を付けるようにする点や、照明に使う電球などが発する紫外線などによって資料が傷まないように気を付ける点であるという話を、学芸員の方からうかがった。何にしても、この照明について考える時間が欲しかったのだが……。

おわりに

今回の博物館実務実習は、これから勉強をすすめていくうえでとても役に立つものであった。特にふだんからあまり考えてみることもなかった展示について、展示をつくってゆく最初の段階から考えて、1つの展示を作り上げるまでを経験することができた「展示替え実習」は、これから展示について考えてゆくのによいきっかけとなったと思う。1つの展示をつくり終えて、自分では少し気になる点がないわけではないがかなりの充実感を得ることができた。しかし、入館者の反応を見て、直すべきところは直して、できるだけ「完全」な展示をつくりあげることが展示をつくるうえで、いちばん大きな目標になるのだと自分では考えている。

*

●当館では、平成3年9月5日～19日まで5大学6名の博物館実習生を受け入れました。期間中は、資料館の運営や学芸実務のほか、常設展示室の1コーナーについて展示替え実習を行いました。本稿は、その際に実習生から提出されたレポートを抜粋したものです。

—【表紙写真】—

大磯丘陵のセミ

ぬけがら調査で収集した資料。クマゼミとハルゼミは大磯町初記録。〈データ〉Fig.2)ニイニイゼミ♀ 大磯91.Jul.27 col.中島かおる、Fig.3)ツクツクボウシ♂ 富士見が丘田代公園91.Aug.3 col.村田愈子、Fig.4)ヒグラシ♂ 百合が丘峠公園91.Aug.12 col.遠藤清司、Fig.6)ミンミンゼミ♀ 大磯中学校91.Aug.31 col.村岡直子、Fig.5)アブラゼミ♀ 高米神社91.Aug.3 col.齊藤奈々・雅史、Fig.7)クマゼミ♀ 楊谷寺91.Aug.13 col.三浦寿夫、Fig.1)ハルゼミ♂ 西小磯八坂神社裏91.May.10 col.植真史

大磯丘陵のセミのぬけがら調査'91の概報

大磯丘陵に生息するセミは7種。6月に羽化するハルセミ以外は、すべて夏休みに見られる。去年の夏、資料館では一般・学生から参加を募り「セミのぬけがら調査」をした。鳴声に馴染みはあるが、ぬけがらは区別できない参加者が多かった。だが、調査が終わる頃には見わけることができる70名のセミプロが誕生した。今回は、収集したぬけがらを集計してわかったことを簡単に報告する。

7157個。大磯町と二宮町の65ヵ所で収集したぬけがらの総数だ。みかん箱で5箱分にあたる。種類は、断然にアブラセミが多く半分を上を占めている。次いでヒグラシ・ミンミンゼミと続く。8月初旬に羽化がほぼ終わるニイニゼミと9月初旬まで羽化するツクツクボウシの集まりが悪いが、おむね全体像をつかんだ結果だと思う。また、大磯町が北限になるクマゼミも78個と常識(?)はずれに集まり大喜びだ(図1)。

大まかな環境別にみると、市街地と丘陵部で種類の割合が違うことに気づく。アブラセミは市街地に圧倒的に多いが、丘陵部では3割弱だ。一方で、ヒグラシは市街地でからっきしなのに、丘陵部だと半数を占める勢いである。また、ミンミンゼミも極端ではないが市街地に比較して丘陵部は2倍となっている(図2)。

市街地を細かくみると、ぬけがらは社寺・公園・住宅から収集されている。そのなかで、ヒグラシとミンミンゼミは、社寺や公園などのわずかな自然林が残る場所で発生していた。逆にアブラセミは、林がまばらな住宅や公園に高密度に見られた(図3)。また、クマゼミはアブラセミと採集されることが多かった。

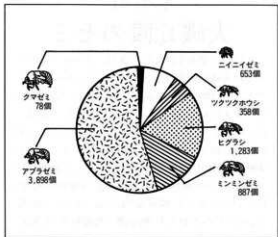


図1 収集したぬけがらの種類構成

この結果から、豊かな自然が残る丘陵部では5種類が生息し、アブラセミの全体に占める割合が減るといふ浜口(1982)の報告が再確認できた。減ったアブラセミにとって替わったのは、ヒグラシやミンミンゼミであった。また、市街地の社寺や公園は、少ないながらもすべての種類のぬけがらが収集されたことから、セミの発生にとって重要な場所であることもわかった。

ある場所で収集したぬけがらの種構成が、環境と関係することは、浜口(1982)の報告以後、湘南地方や関西などでデータが蓄積されつつある。しかし、神奈川県横浜市ではミンミンゼミが市街地で大発生するという異なった傾向の情報もあり、いろいろな場所で収集し、環境指標性を考えていく必要があるだろう。

ヒグラシの大合唱がスギ林で聞けることはよく知られている。セミには林による好き嫌いがあるのだろうか。この疑問を解決するため、丘陵部では意図的にス

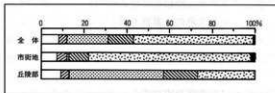


図2 市街地と丘陵部での種類構成

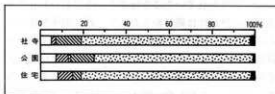


図3 市街地での種類構成

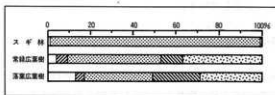


図4 林による種類構成

ニイニゼミ ツクツクボウシ ヒグラシ ミンミンゼミ アブラゼミ クマゼミ

ギキ・落葉広葉樹林・常緑広葉樹林ごとに収集した。

図4が、それぞれの林別に見た種構成である。常緑広葉樹林と落葉広葉樹林では、ニイニゼミとミンミンゼミにやや目立った違いがあるが、すべての種類がどちらの林にも均等に発生しているようである。林(1991)によれば、成虫の寄生植物の範囲は一般的に広いと言うが、確かにぬけがらを集計して、うなずける結果であった。しかし、スギ林については、明らかにヒグラシの割合が高く、他のセミの発生がほとんどみられない。これはいったいどうしたことか？

スギ林におけるセミの発生は、広葉樹林のそれと種構成が違ふ。多くの報告でも「ヒグラシはスギ林に多い」とされている(浜口1982、林1984など)。確かにスギ林はヒグラシのぬけがらばかりだ。しかし、今回、同じ面積の広葉樹林4ヵ所とスギ林2ヵ所で、ヒグラシの総数を比較してみたが、いづれの場合も広葉樹林の方が多かった。つまり、どの林でも総数は変わらないが、スギ林では他のセミが極端に少ないため、ヒグラシの割合が高くなっているのだ。結局、セミに林の好き嫌いがあるかの解答は、「大磯丘陵では、林によらず発生するが、スギ林ではヒグラシ以外はよりつかない」というところか。スギの林床は、地表性昆虫が少ないように感じるが、なにか生物に共通したデメリットがあるのだろうか。いづれにしても、各林の面積と発生数のデータをもっと蓄積してみたい。

クマゼミは南方系のセミで、♀の移動力が大きく、しばしば発生地から離れた場所で鳴声聞くことができる。しかし、ぬけがらが発見できるのは三浦市城ヶ島と大磯町を結ぶ線の南側である。なお、藤沢市・茅ヶ崎市(槐1986)や平塚市(浜口1982)の報告があるが、いづれも植物の移植による移入だと考えられている。

大磯丘陵のクマゼミは北限にあたるといわれて久しいが、誰も大磯町・二宮町でクマゼミのぬけがらを採った人はいない。二宮町では、奥村清氏が50年前から多数の声を吾妻神社付近だけで聞いているようだ。大磯町では、大磯地区で稀で、二宮町境まで行くと次第に聞く割合が増えるという。また、1990年代に入り、中丸・西小磯・大磯駅付近でも7月後半から聞けるようになった(奥村・中山私信・林1991、槐観察)。

このような状況から、今回の調査でぬけがらが採れると確信していたが、終わってみれば予想をはるかに上回る78個が集まった。採れた場所は、まばらに木が生える乾燥した住宅の庭・公園・神社などで、大磯丘陵の市街地に広く点在していた。50年前に局所的であったとの証言、1990年代に多くの鳴声聞けるようになったとの観察例から考えると、近年、大磯丘陵での

分布が広がっているように思える。ちなみに今回は湘南地方で一斉調査を行なったが、平塚市で1個が収集されただけである(浜口・岸・松本・高橋私信)。クマゼミは市街地やミカン畑に多いセミで、分布の広がりには、むしろ環境の悪化を物語っているようで手放しでは喜ばない。クマゼミは地中で8年ほど過ごすので、気長に北限での動向を追いかけたい。

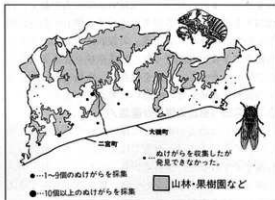


図5 大磯丘陵でのクマゼミの分布

ぬけがらを調べると、環境や林との関わりがみえてくるかな。大磯丘陵でクマゼミを見つけると、全国の関心のある人から注目されるぞ。夏休み期間中にぬけがらを集めたみんながこのテーマで取り組んだ。集計が終わってみると、わかったことも多かったが、次の疑問やテーマがでてきて、また調べたくなった。来年も継続したいので参加よろしく。最後になったが、参加された方々、情報を頂いた奥村清・中山和也・浜口哲一・岸一弘・松本丈人・高橋和也の各氏、文献収集でお世話になった斉藤洋一氏に深く御礼申し上げる。

(イラスト・槐まゆみ 文・当館 槐真史)

引用文献

- 浜口哲一 1982 「平塚市におけるセミ類の分布」『自然と文化』平塚市博物館研究報告 5: 81-92
- 林 正美 1984 「日本産セミ科概説」CICADA 5 (2) 1-51
- 1991 「茅ヶ崎に分布するセミ」茅ヶ崎市史研究 15: 102-111
- 槐 真史 1986 「茅ヶ崎市・藤沢市におけるセミ類の分布」湘南地方昆虫調査報告書 2: 73-84

【トピックス】

◇「大磯と吉田茂」展終わる

去る10月13日～11月10日までの約1ヶ月間、開館3周年記念特別展として「大磯と吉田茂」展を開催しました。開催にあたっては遺族や関係者の方々、外務省外交資料館をはじめ各関係団体のご協力をいただいたほか、大磯町内からもたくさんの資料や情報が寄せられました。また、期間中の入館者は6000人を数え、没後24年を経た現在も吉田さんに対する関心の高さに驚きました。しかし「吉田茂」の存在はあまりに大きく当館のような小規模展では、到底全貌を捉えきれものではありません。これを機会に、今後も更にとくさんの資料を蓄積していきたいと考えています。

◇エベスコ（恵比寿講）が復活！

11月20日は商売の神として信仰されているエベスコの日です。この日、商家では店先にミカンを置いてお客や子どもたちに無料で振舞ったものでした。豊漁の神として信仰する北下町では、他とは少々違う漁師町ならではの内容でしたが、既に途絶えて久しく戦後は行なわれていませんでした。そこで、古老の記憶を頼りに、今回実に40年ぶりの実施となったのです。

【行事案内】

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧ください。

▼郷土史講座 (40名)

- ① 2月15日(土)「大磯の住まいとくらし」
- ② 2月22日(土)「大磯宿のよもやま話」
- ③ 2月29日(土)「近年の発掘調査の成果から」

いずれも午後1時30分～3時

講師：東海大学工学部助教授 稲葉和也氏ほか

▼ワラソウリをつくろう！ (20名)

大磯の伝統技術をマスターしませんか。

3月7日(土) 午後1時～4時

▼巣箱をつくろう (小学生以上 20名)

シジュウカラ用の巣箱を作って、城山公園の木にかけます。

3月8日(日) 午前9時～午後3時

▼企画展

「相模湾の漁船と船大工」

3月1日(日)～4月5日(日)



子どもたちが潮から降ろされたエベスコさん・ダイコクさんに向かってすわり、前の人の肩に手をかけて、ちょうど船を漕ぐように体を前後

に揺すりながら掛け声をかけはじめます。「ショーエンショ、コリヤコリヤ、ショーエンショ」すると最年長の2人の子どもが、ミカン、柿、鯛など御供の品々を次々にセリにかけていきます。「きょうはミカンを船一船積んできた」「値はいくらだ」「トチマントッピャクリョーだ」「トッピャクリョーにまけろ」「まかんね、まかんね」「じゃあ、須賀でも南湖でも持ってっちめえ」……そして最後の品がセリ落とされます。「トッピャクリョウにまかった」「買った!」交渉は無事終了し、子どもたちは家人からミカンと小遣いを手渡されました。今回は1軒だけでしたが、昔は町内の家々をすべてまわったそうです。このような伝統行事をいつまでも伝え残したいものです。

【資料の受入】

(寄贈) ご協力ありがとうございました。

高 麗	久保田光藏氏	農具一括
東 町	大久保幸造氏	サイゾチ他
大 磯	加藤嘉義氏	半纏
大 磯	安部川正美氏	油彩画
大 磯	菊池 清氏	へら(和裁用)
大 磯	木村純子氏	ツヅラバコ他
東 小 磯	添田義彰氏	古文書
東 小 磯	宝示戸洋一氏	掛軸、典籍
西 小 磯	渡辺広平氏	古文書
国府本郷	添田嘉一氏	手廻、アンカ
国府新宿	加藤和夫氏	古文書、宮詣り着他
平 塚	吉野順次氏	古文書、掛軸
平 塚	今井健一氏	レコード
秦 野	原島照寿氏	コテ(頭髪用)
茅ヶ崎	太田かおる氏	箱枕

Report 一大磯町郷土資料館だより No.3

平成3年12月15日

編集発行 大磯町郷土資料館

〒255 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1

TEL 0463 (61) 4 7 0 0

FAX 0463 (61) 4 6 6 0